

菊池寛著作目録拾遺

大西 浩史

本稿は、菊池寛の著作目録として網羅的な大西良生編著「菊池寛全著作目録」（私家版・平成4年10月10日）、同「補遺」（平成5年12月26日）、昭和女子大学近代文学研究室著「菊池寛著作年表」（『近代文学研究叢書』第63巻・昭和女子大学近代文化研究所・平成2年6月5日）、同「第63巻著作年表・資料年表補遺」（『近代文学研究叢書』第64巻・平成3年4月8日）によって、菊池の著作はほぼ集められているようであるが、なお何点か補うべきものを目にした。寓目の範囲内での落穂拾いに過ぎず、半数は青山毅氏、山内祥史氏、池内輝雄氏によって既に報告されたものであるが、菊池著作としてここにまとめて報告しておく。

【凡例】

1. 標題、掲載紙誌、巻号・年月日、頁数、注記、解題の順に記した。
2. 標題の前に◎、解題の前に*、注記には〈 〉を付した。標題と副題の間には、／を記した。
3. 未確認のものは、巻号・年月日の後に「？」を付し、注記に〈現物未見〉と記した。編者のことばも適宜〈 〉内で示した。解題の中では、内容の紹介をし、関連事項に言及したものもある。
4. 表記は、新漢字・旧仮名遣いに従った。繰り返し符号の「々」「>」「>」は用いた。二字分以上の繰り返し符号は使用しなかった。

◎ 犬族解放

『秀才文壇』第18巻第7号・大正7年7月号？ 〈現物未見、小説〉

* 『読売新聞』大正7年6月29日夕刊7面掲載の「各雑誌七月号要目」の欄に、『秀才文壇』の内容が紹介され、その中に「犬族解放（寛）」とある。

「犬族解放」は、『中外日報』大正3年11月29日付に「草田杜太郎」の筆名で発表されたことが明らかになっている。その後、初刊単行本『無名作家の日記』（新潮社・大正7年11月20日）に収められたときに「手直しして所載」（大西良生氏）したとみられていたが、『中外日報』に発表したものを一旦『秀才文壇』に再録していたことがわかった。『秀才文壇』再録にあたり、菊池が本文の改稿をし、その雑誌掲載本文を単行本に収めたとも考えられる。

◎ 久米正雄論

『秀才文壇』第18巻第7号・大正7年7月号? 〈現物未見、人物評か〉

*上記と同じ「各雑誌七月号要目」に拠る。「久米正雄論（芥川、赤木、江口、鈴木、菊池）」とある。芥川龍之介、赤木桁平、江口渙、鈴木三重吉、菊池寛の五名によるものと推定される。

◎ 批評家の権限

『新潮』第30巻第3号・大正8年3月号 12-14頁 〈評論〉

*大西良生氏の「全著作目録」には収録されているが、『菊池寛全集』第22巻（高松市・菊池寛記念館刊・平成7年10月30日）の掲載本文（404-406頁）末尾に「（発表年月、発表紙誌不詳）」とあるので、改めて指摘しておく。初出『新潮』では、菊池の「浪漫主義の本質」の直後に掲載されている。

吉田精一『近代文芸評論史 大正篇』（至文堂 昭和55年12月20日）には、「第5章 作家の批評——印象批評 5菊池寛 印象批評否定論」の項、501頁で、この本文が取り上げられている。

なお『新潮』の、この本文のあとに、「創作発作の少い僕は——久米正雄氏宛——」の題で、京都大学時代の菊池が久米に宛てた手紙が紹介されている。この書簡は全集に未収である。「雑誌発刊のこと成瀬よりもきいた。活字になる当がなければ書けないほど創作発作の少い僕は雑誌がなければ何も書けないのだ。」と、第4次『新思潮』発刊に臨む心境を綴っている。そのあと、近況、京都の様子があり末尾に編集側か、「（大正4年）」の記を入れている。

◎ ある恋の話

『婦人之友』第13巻第8号・大正8年8月号 〈小説〉

*「現在まで、発表紙誌は未詳である。のち、『冷眼』、平凡社版『菊池寛全集』第二巻、改造社版『菊池寛全集』第三巻に収められた。」（高松市版『菊池寛全集』第2巻「解題」681頁）とあるように、初出紙誌が確認されていなかった。なお、『読売新聞』大正8年8月9日付第7面の正宗白鳥の「雑誌月評（三）」で次のような言及がある。

「婦人之友」に出てゐる同氏（菊池のこと——稿者注）の「ある恋の話」は面白い。傑作である。私は読了つて旨いと思つた。それ以上故事つけ批評をするに及ばないと思ふ。

◎ 十月文壇の諸事実（一）～（七）

『大阪朝日新聞』夕刊 大正8年10月7、8、9、10、11、12、14日、全て第1面。
（「毎日文壇」欄。標題のあと、「菊池寛」の署名と「一」～「七」の番号。11日付末尾に「（大阪にて）」の記あり。14日付末尾に「（完）」の記） 〈作品批評〉

*『東京日日新聞』大正8年10月4、5、7、9、12日にも第5回まで掲載されている（4、5、7日付は第4面、9、12日付は第6面）。（「日日文芸」欄。7日付には「三」の番号なし。）

（一）の概略。

「ダンヌンチヨ氏飛行来に就ての諸家の感想」（『新潮』10月号「ダンヌンチヨ氏来朝の風聞に対して」）の評。「著作家組合に対する岩野泡鳴氏の批判と主張」（前掲『新潮』誌上「著作家組合に対する批判と主張——予は何故に同組合に入らぬか——」と思われる）の感想。『新潮』の「不同調」欄が匿名であることに対する批判。小川未明「記憶は復讐する」評。上司小剣「末日」評。久米正雄「良友悪友」評。なお、大正8年12月号の『新潮』「不同調」欄では、菊池のこの「不同調」匿名批判を引用し、反駁している。

(二) の概略。

作品評。吉田絃二郎「熊のわな」、中戸川吉二「放蕩児」、舟木重信「一つの存在」。

(三) の概略。

作品評。宇野浩二「^{ママ}転転」、広津和郎「ダンス」、葛西善蔵「無心に」、渋谷美代子「地上にひざまづきて」、尾島菊子「青白い焰」、久米正雄「大人の喧嘩」、畑耕一「午睡」。

(四) の概略。

正宗白鳥の人物と作品「大村一家」、中村星湖「脳病院の裏」、中村吉蔵「鎖」の評。

(五) の概略。

秋田雨雀の童話・秦豊吉の評論「労働者の悲劇機織を論ず」についての評。加藤武雄「愛犬物語」、長田幹彦「女人堂」の評。

(六) の概略

佐治祐吉「萎びた林檎」、細田源吉「避くべからざる場合」、高倉輝「砂丘」の評。

(七) の概略

室生犀星「性に目覚める頃」、大泉黒石の自叙伝、芥川龍之介「妖婆」の評、江口渙の異常性と作品「悪霊」について。

◎ 文芸家の思想的分野

『改造』第2巻第6号・大正9年6月号 61頁 〈アンケート回答〉

* 目次の題は、「日本思想界の三十一系統と現代文壇二十系統の分野」の見出しの末尾に「諸作家の人性観^{ママ}と芸術観 菊池寛」とある。菊池の本文箇所^{ママ}に表題はなく、「菊池寛」とのみある。江口渙の所に「文芸家の思想的分野」の表題が付されている。頁上欄にも同名の表題がある。アンケートの回答と思われる。この表題のもとに回答を寄せたのは、江口、宇野浩二、水守亀之助、菊池の四人。「凡ての作家は、いろいろな要素を持つて居るもので、それを簡単に別けるなど云ふことは、甚だ下らないことだが、かりそめに別けるならば、先づ人生観^{ママ}上の差別で別け、その次に芸術観^{ママ}上の差別で別けねばならぬ。人生観^{ママ}上のイズムと芸術観^{ママ}上のイズムをごつちやにしてはならない。」という前書きのあと、

(イ) 人生に対する態度の上で。

(一) 理想主義乃至はそれに近い人。(人道主義、社会主義、人間主義、民衆主義、等は之に属す) 〈武者小路、有島、志賀、広津ら11名〉

(二) 現実主義乃至はそれに近い人。(自然主義、個人主義、虚無主義^{ママ}享楽主義などは、之に属すと思ふ) 〈谷崎、芥川、久米、荷風ら11名〉

(三) 以上の中間にあるやうに思はれる人。 (藤村ら5名)

(ロ) 芸術に対する態度の上で。

(一) 理想主義に属する人 (芸術の上では、理想を持つて居る人。芸術上の浪漫主義者、高踏主義、芸術至上主義。象徴主義。郷土芸術主義之に属す)
(谷崎、久米、荷風、佐藤春夫ら11名)

(二) 現実主義に属する人々 (芸術上の自然主義、現実主義を奉持する人々)
(志賀、広津、花袋ら8名)

と分類する (引用中の句読点ママ)。本人は含めていない。「芥川などは人生観の上では可なりリアリストであるが、芸術的にはアイデアリストだと思ふ。武者小路氏は、人生観の上では、アイデアリストであるが、芸術に就てはリアリストだと思ふ。」と、二人を例に挙げて前述の見解を強調する。最後に「不思議なことに、人生に対して理想を持つて居る人々は、芸術的に理想を持つて居ない人が多く、芸術に対して理想を持つて居る人には、人生に対して何等の理想をも示して居ない人が多い。」と包括している。

◎ (題未詳)

『実業之世界』大正10年1月号? (現物未見、小説?)

*『読売新聞』大正9年12月11日付第7面の「よみうり抄 『実業之世界』新年号」の欄に、「創作欄には」「『題未定』(徳田秋声)(菊池寛)」という記載がある。

◎ 形而上的著作権

『時事新報』大正14年6月18日 (現物未見、評論?)

*池内輝雄「時事新報『文芸』欄目次(一一)——大正14年1月~6月——」(『稿本近代文学』第19集、平成6年11月10日)の6月18日の項に「形而上的著作権 菊池寛 評論〔「生きてゐる小平次」〕」とある。

◎ 長田君に謝ること

『時事新報』大正14年6月20日 (現物未見、評論?)

*前掲「時事新報『文芸』欄目次」の6月20日の項に「長田君に謝ること 菊池寛 [評論]」とある。

◎ 時感二つ

『文芸時報』第1号 大正14年11月20日 第1面 (感想)

*山内祥史「『文芸時報』目録」(「神戸女学院大学論集」第23巻第3号・昭和52年3月15日。のち『日本近代文芸考』双文社出版 昭和58年6月15日所収)に掲出。以下、『文芸時報』掲載分はこの山内祥史氏の報告に拠る。

本文には、標題・氏名のあと「新聞小説」と「著作権法」の二つの小見出しがあげられている。引用は『復刻版文芸時報全3巻』(不二出版・昭和62年12月10日)による。以下同じ。

新聞小説は「何か非常に普通と違つた事件がないと、どうしても読者をつないで行

く事はむづかしい」と述べて、『第二の接吻』が、「おもしろいストーリーを見出す事が出来ずに、仕方なくこしらへたもの」で、「もう当分は書きたくないと思つて居る」と、新聞小説執筆に対する心情を示す。また、今日の著作権法が「実に不完全なもの」で、「今弁護士に頼んで、改正法案の原文を作製中」で、「警保局に持つて行つて話してみても、いけなかつたら議会に出すつもり」と、改正に意欲を見せる。

◎ 最近劇界所感／新劇団体の勃興よりよい脚本を書くこと

『文芸時報』第4号（1月上旬号） 大正15年1月5日 第1面 〈感想〉

* 「劇場の不振は興業師の心得のまちがつてゐる事もあるが、脚本作家もその半ばの責めを負つてゐる」として、「現代の劇を救ふものは」「よい脚本である」と「力のある」脚本の出現を期待する。

◎ 文芸家協会の弁／考へ違ひは甚だ迷惑

『文芸時報』第7号（2月下旬号） 大正15年2月20日 第1面 〈弁駁〉

* 文芸家協会について「文筆で立つもの同志の相互扶助と云ふ事が、一番大きな目的」ということを繰り返し、「決してケチな了見からではない」ことを強調する。

◎ 著作権改正に就て

『時事新報』大正15年3月2日 〈現物未見、評論？〉

* 池内輝雄「時事新報『文芸』欄目次（一三）——大正15年1月～6月——」（『稿本近代文学』第20集、平成7年11月15日）の「大正15年3月」の項では、2日の文芸欄記事として「著作権改正に就て 菊池寛〔評論〕」を掲出している。

◎ 出版道徳に就いて／予約もの流行と八雲全集

『文芸時報』第12号（5月上旬号） 大正15年5月10日 第1面 〈感想〉

* まず、「予約出版は本屋に金の融通をつけさせるに便利な方法である」だけに、「予約出版当事者も充分に責任を持つてやり遂げて貰うことを要望する。その予約出版物のなかで「第一書房から出る『小泉八雲全集』」について、「やさしいもの」を「邦訳してより一般的にしてゆくのは結構な事」とする。

◎ どんな作品を

「春陽堂版『明治大正文学全集』内容見本」 昭和2年4月23日？ 〈現物未見、感想？〉

* 青山毅「『明治大正文学全集』について」（「ブックエンド通信」第1号・昭和53年12月。のち『文学全集の研究』明治書院・平成2年5月25日所収）に拠る。

「明治大正に於る傑作一斑」という作家による感想文（17-20頁）のひとつ。

◎ 文壇の鬼才／芥川龍之介の自殺

『改造社文学月報』第8号 昭和2年8月5日 4-5頁 〈弔辞〉

* 青山毅「『改造社文学月報』細目」（「ブックエンド通信」第4号・昭和54年12月、上記単行本に収む）による。「改造社文学月報」に載せられたこれ以外の著作は、大

西良生氏の目録に収録されている。

芥川の自殺に関する記事、報道記事、泉鏡太郎の弔辞について菊池の弔辞が、5頁に掲載されている。芥川の死亡を報道した記事の終わりに「今茲に故人を偲ぶよすがとして鏡花氏と菊池氏の弔辞を転記する」と記されている。

なお、この「月報」第5号（昭和2年5月5日）には、二つの菊池に関する参考文献がある。これまで未掲出であるようなので、挙げておく。

「菊池寛の文壇へのデビュー」淡 貞太郎

「菊池寛氏の人及作品の印象」三宅やす子

◎ わが愛読作家

『長篇小説月報』（『現代長編小説全集』付録）新潮社 第6号 昭和3年8月1日？
1頁 〈現物未見、随想？〉

* 大西良生氏の「目録」77頁、近代文学研究叢書・「著作年表」218頁ともに「3」号とあるが、青山毅「『長編小説月報』細目」（「ブックエンド通信」第9号・昭和59年9月。上記単行本所収）に拠れば、「第6号」となっている。